

## 5 銚子口の獅子舞

「銚子口には有名な獅子舞があるらしいけど、すごいわね。見に行つたことある？」

「あつ、はい。小さい時に……。」

ぼくは中学二年生。吹奏楽部に所属し、打楽器を担当しています。二年生に進級して間もないころ、新しく赴任された顧問の先生に声をかけられてとっさに答えたものの、すぐには思い出すことができませんでした。

それまでぼくは獅子舞にはまったくと言ってよいほど興味がなく、知識もありませんでした。古めかしくて、自分とは関係のないものだと思つていたので。しかし、小さい頃に見に行つた記憶をたどっていくと、少しずつ小学生のころの思い出がよみがえってきました。

「大ちゃん、お手伝いに行くから、ちょっとお母さんについてきてね。」

ちようど母がお祭りのお茶出しや接待などの当番の時、ぼくも一緒にいっていくことになったのです。もちろんいっていても特にやることもないため、外で遊んでいました。そこに、ちょっと怖そうな仮面のようなものをかぶつた人たちが、ぞろぞろと出てきまし

保存会の方々はぼくたちにやさしく話しかけてくださいました。また、集会所に飾られている古い獅子頭ししがしらを見ると、いろいろなことを教えてくださいました。

「銚子口の獅子舞は三百年以上もずっと続いているんだよ。大地震、ききん、戦争——どんなことがあっても、一回も休んだことがないし、これからだつて絶やさずに受け継いでいくよ。」

温かい言葉で、しかし誇りと強い意志をもって話される保存会の方々に接していると、なんだか身が引き締まる思いがしてきました。

夕闇の暗い中、境内では男の人たちがかわるがわる踊りの稽古をしています。太鼓や笛の音に合わせたそれぞれの獅子の動きは、思つていたよりもはるかに迫力があり、すごいなあ……、と見とれていました。

「あつ、先輩だ！」

稽古をしている中に、なんと同じ中学校を卒業した高校生の先輩がいたのです。ドキドキキツ……。ぼくの体の中に熱いものがこみ上げ、胸が高鳴るのを抑えることができませんでした。しかも先輩はぼくたちのことなど目に入らないほど一生懸命に稽古に熱中しています。ぼくには小学生の頃に見た汗びっしりになった男の人たちの姿が思い浮かび、先輩の姿とひとつに重なり合いま



た。ぼくは思わず、木の陰に隠れてしまいました。すると笛や太鼓が鳴りはじめ、それに合わせて面おもてをつけた人たちが踊りはじめたのです。ぼくは何が何だかわからないまま、けれどもどんなことをするのか好奇心もあつて、じつとその様子を見ていました。しばらくすると、獅子舞を終えた男の人たちが、かぶっていたものをはずし、着替えに戻ってきました。頭も顔も上半身も汗びっしりで、ぼくにとつては獅子舞そのものよりも男の人たちの汗のほうが心に焼きついていました。

お祭りは年に三回行われ、その時に獅子舞が奉納ほうなされます。十月に行われる今度のお祭りは、顧問の先生の一言もあり、ぼくにとつて何だかこれまでとは違う気がして、獅子舞をもっとよく見てみようという気持ちになっていました。部活動で毎日音楽にふれているので、笛や太鼓の音にも興味がわきはじめていました。

そんな矢先、ちようど運よく近所に住む獅子舞保存会の人に「稽古けいこを見に来てみない？」と声をかけられたのです。顧問の先生に相談すると、ぜひ行つてらっしゃいと背中を押していただき、吹奏楽部の仲間との見学が実現しました。

「こんばんは。」

遠慮がちにあいさつすると

「やあ大ちゃんじゃないか、もう中学二年生か。大きくなったなあ。」

「あゆちゃんの弟は、たしかうちの孫と同級だな。」

した。今までは古めかしくてなじみにくい——そんな印象ばかりが強かつた獅子舞が、ぼくに急接近してきたように感じられました。

踊りに合わせて演奏されるのが笛と和太鼓です。笛にチャレンジさせていただいたところ、はじめはまったく音が出せませんでした。何度かためしているうちにピーツと出た瞬間、「ぼくにもできる。」と、とてもうれしくなつてしまいました。吹奏楽部の練習ではいつも楽譜と悪戦苦闘していますが、ここでは楽譜がなく、大人たちが演奏するのをまねてうたい、人から人へと伝えられています。ずっと昔から奏かなで伝えられている笛や太鼓の音が胸とお腹に「ズシン」と響き、日本の楽器の音もかっこいいなと思えました。

この日の体験でぼくがこれまで抱いていた獅子舞のイメージは一八〇度変わりました。歴史と伝統を支えるぼくの周りの身近な人たち、そして音と動きが一体となつて迫ってくる力と感動。見学できて本当によかつたと思えます。

一週間後はいよいよ獅子舞の本番です。

ぼくは仲間を誘つて絶対に見に行こうと思つています。

そして、これからもずっと、ずっと……。

